

(1) 事業名称等

【事業名称】 気仙沼市内湾地区の国登録文化財群の復興プロジェクト

【実施団体】 気仙沼風待ち復興検討会

【事業経費】 1,790,000 円

【事業領域】 文化財建造物防災に関する活動

(2) 事業の目的

内湾地区は気仙沼街道の宿場町、魚問屋街等として栄えた。同地区は昭和 4 年（1929）に大火が発生し市街地を焼失するが、大火後には気仙大工や全国から駆けつけた職人により和洋折衷の様々な凝った意匠の復興建築が建てられた。

これらは多数が残存し、平成 19 年度には文化庁「NPO による文化財建造物の活用モデル事業」の支援を受け、地元建築士らによる「風待ち研究会」が調査や活用提案を行った。この調査をもとに歴史的建造物のうち数棟が国登録文化財に登録されていた。

しかし、東日本大震災により内湾地区と登録文化財群は大被害を受けた（男山本店店舗 3 階のみ残存、角星店舗 2 階のみ残存、武山米店店舗 1 階部分破損、三事堂ささ木店舗・小野健商店土蔵破損、その他滅失したものもある）。また、地盤沈下復旧や津波対策のため面的基盤整備が想定されており、破損しながら残された登録文化財も保存が危惧される状況であった。

早急に、基盤整備の方向性と調整した修理計画の検討が必要であり、また、費用について SOC 基金（東日本大震災被災文化財復旧支援事業）に申請しており、その推進のための検討や活動も必要とされた。さらに気仙沼の歴史文化を活かしたまちづくりに役立て、市民意識を喚起するうえでも、段階的な活用計画の検討が必要であった。平成 23 年度に国土交通省が実施した「復興における歴史・文化資産の継承等調査」により、こうした課題が指摘されており、これを踏まえ今年度必要とされる調査検討と活動を行った。

(3) 事業活動の内容

【気仙沼風待ち復興検討会の設立】

本事業の募集を契機に、国登録文化財 5 棟の所有者、風待ち研究会有志（同研究会は会員の多くが被災し、活動休止となっていた）、住民や商業者有志、市役所職員有志、地区外から応援に入った専門家等により、任意団体である「気仙沼風待ち復興検討会」が設立された。

検討会設立時の外部応援団は、泉田英雄（豊橋技術科学大学准教授、建築史）、阿部俊彦（早稲田大学客員研究員、都市計画）、池ノ上真一（北海道大学観光学高等研究センター助教授、観光）、鈴木伸治（横浜市立大学准教授、都市計画）、山本玲子（全国町並み保存連盟事務局次長）、三浦卓也（マヌ都市建築研究所）。

【気仙沼風待ち復興検討会の開催】

月一回程度のペースで検討会を開催した（計 6 回）。被災地の状況は日々変化しており、検討会の中で情報共有を行い、登録文化財群の保存活用に係る様々な検討を行った。検討会の開催日程と内容は以下の通りである。

また第2回からは、復興に係る都市計画課の担当も出席し、都市基盤等の進捗状況について情報提供を行ってくれた。

■第1回検討会（総会）：平成24年5月18日（金）ワンテン 女性プラザ

- ①検討会の活動方針、修復計画、予算計画について
- ②役員選出について

■第2回検討会：平成24年6月28日（木）気仙沼プラザホテル（市民公開した）

- ①内湾地区の登録文化財の修復進捗状況について
- ②講演会 ・豊橋技術科学大学 泉田英雄准教授「気仙沼の魅力～北の長崎をめざして」
・NPO 全国町並み保存連盟 山本玲子事務局次長「気仙沼のまちなみ」

《6月29日委託事業契約》

■第3回検討会：平成24年7月28日（土）ワンテン 和室

- ①内湾地区の登録文化財の修復進捗状況について（角星の曳き家、仮囲い等）
 - ②モニターツアーについて
- ・北海道大学池ノ上助教授、同大学院生石田幸さんからの観光に係る提言
 - ・気仙沼風待ち地区の歴史文化の観光ストーリーづくり
- ⇒金山に係る近世の開拓、昭和の大火と復興、その後の水産業の繁栄等について、地区に残る様々な資源を魅力的に見せて行く方法を話し合った。

■第4回検討会：平成24年9月11日（火）市役所 第三会議室

- ①内湾地区の防潮堤案の議論状況について（市都市計画課から説明）
- ②内湾地区の登録文化財の修復進捗状況について（男山本店の曳き家、仮囲い等）
- ③第1回モニターツアーについて（ツアー構成、参加対象、宣伝、費用、協力体制等）

■歴史文化シンポジウム「気仙沼で守りたいものがある」後援

平成24年10月17日 ワンテン大ホール（工学院大学後藤治研究室主催、マヌ三浦報告）

■第5回検討会：平成24年11月22日（木）ワンテン 大ホール

- ①内湾地区の登録文化財の修復進捗、活動状況について
- ②モニターツアーの報告、第2回の取り組みについて
- ③検討会の法人化について（会員の了承）
- ④市民向けの広報活動について（HP、風待ち通信、ブログ、説明会その他宣伝方法）

■第6回検討会 平成25年2月23日（土）ワンテン 和室

- ①活動状況、内湾地区のまちづくりの状況について
- ②第2回モニターツアーの報告について
- ③文化庁「NPO等による文化財建造物の管理活用事業」報告会への参加について
- ④「風待ち通信」の発行、会員ブログへのアップ（武山米店ブログ）
- ⑤法人化、垂れ幕の設置、市民向けの活動報告会、SOC基金二次申請について

【SOC基金による応急修理の実施について】

修理費用については、気仙沼風待ち復興検討会が5棟の登録文化財群の一体的な保存活用を検討することとして申請を実施し、第一次支援の採択を得ることができた。そこで、当面の応急修理について、泉田教授が中心となり、設計、施工者の手配、施工監理を実施した。

■奥に流されていた角星店舗の隣家との接触部分を除去し、曳き家し保管・養生した。

(クマケー建設(気仙沼市)により施工)

■隣地にやや流されていた男山本店店舗を元敷地に曳き家し、保管・養生した。さらに11月に枕木の一部を鋼鉄製に付け替え工事を実施した。

(石川工務所(山梨県甲州市)により施工、男山本店は破損が大きく範囲度が高いと判断し文化財修復の経験豊富な業者を手配した)

■1階部分が破損し単管パイプで仮措置した武山米店店舗及び主屋の補強工事を行った。

(補強工事:小野良組(気仙沼市)、仮囲い工事:尾形建設(一関市千厩町)により施工)

■小野健商店土蔵の粗壁塗りまで行った。(及川左官(一関市室根町)により施工)

【登録文化財群の保存活用計画(案)の作成】

今後想定される、復興に伴う都市基盤整備と調整しながら、登録文化財群の保存活用計画案を作成した。都市計画の進展に併せて4段階の段階的計画とし、各段階に必要な修理内容と、そのための概算費用を算出した。

内湾地区においては、今後防潮堤整備と地盤嵩上げ、土地区画整理事業が想定されている。大規模な基盤整備が想定される場所に位置する登録文化財は一時的に曳き家し、基盤整備後にもとの位置に戻す工法を想定した。

角星店舗、男山本店店舗は、魚町にあつて海に近いランドマーク的な存在であったため、魚町の新たな景観形成や商業振興に寄与するため、現在地周辺で保存する方法を考えた。

なお年度途中で、新たに所有者が保存活用を希望する歴史的建造物があらわれたため、これも含めた6棟の計画とした。また今後登録文化財となる可能性がある歴史的建造物を抽出し、これについても計画に含めた。

【モニターツアーの実施】

平泉、一関と気仙沼内湾地区を結ぶ東西街道は歴史的に交流があつた道筋であり、歴史文化資源が数多く残存している。例えば、一関には世嬉の一酒造(国登録)、中間地点の千厩には横手酒造佐藤家住宅(国登録)、気仙沼には男山本店、角星店舗(国登録)と伝統的酒造に係る施設が残存している。将来的な活用計画の作成や広域的な活用連携方策の確立に資するため、これらを巡るモニターツアーを2回実施した。

参加者にはアンケート調査を実施したところ大変好評であり、平成25年春以降も継続的に実施することとした。

■第1回モニターツアー:平成24年10月11、12日、モニター5名

旅程の概要【1日目】一ノ関駅集合、大船渡線で千厩移動、横屋酒造・佐藤家住宅(国登録)の見学と昼食(蔵サポーターの会等によるガイドとおもてなし)、気仙沼移動、市観光コンベンション協会と合流、まちなみ見学、松井家住宅で休憩、斉藤茶舗見学、被災登録文化財群の見学、男山本店前にテラスを設置し社長の話を聞きながら酒の試飲

【2日目】魚市場見学、朝に水揚げされた鰹を使った「鰹御膳」朝食、一関市室根町折壁に移動、室根山見学と昼食、一ノ関市に移動、世嬉の一酒造(国登録)見学(ガイドによる案内)

■第2回モニターツアー:平成24年12月19、20日、モニター、市民含め5名

新たな試みとして三事堂ささ木店舗内でお茶の時間。ご当主から家の歴史や被災時の様子を聞く。

【情報発信その他のとりくみ】

- 2月下旬 角屋店舗、男山本店、武山米店に垂れ幕、小野健商店土蔵にパネル設置
国登録文化財の応急修理、国内外の募金により施工していることを表示、建物の解説文と被災前の写真をプリントした。
- 2月下旬 SOC 基金二次申請に申請
- 3月上旬 一般社団法人定款認証、法人登記
- 3月8日 NPO 等による文化財建造物の管理活用事業報告協議会（文化庁）
- 3月10日 市民向け活動報告会を開催

（4）事業の成果

- 被災してもまだまだ高い歴史的建造物の価値が明らかになった。
 - 重要な歴史的建造物を登録文化財候補としてリスト化した。
 - 登録文化財の調査では昭和の大火復興の痕跡も明らかになった。
(外壁にラスメタルや鉄筋が使用されていたなど)
- 復興に伴う都市基盤整備と連動した保存活用計画ができた。
 - 関係者の間で最終到達目標とそのため段階的手法が共有できた。
 - 各段階の工費や総工費を算定することで、資金調達目標ができた。
- 復興の第一段階としての応急修理が無事完了した。
 - 着実に前進している印象を市民にも与えた。
 - 応急工事の竣工は復興の第一歩として受け止められた。
- 会員が意識を共有し、保存活用の目標が一致した。
- 一般社団法人となり、今後の活動の体制が整った。
- 都市計画、文化財、観光など様々な分野の連携体制ができた。
 - 例えば、検討会には必ず市都市計画課職員が出席するようになり情報共有ができた。
 - モニターツアーは市観光コンベンション協会や街道沿いの他のまちの関係団体と連携協力した。
- 風待ちで保存活用を目指す歴史的建造物が広がった。
 - 千田家住宅の所有者が保存活用意向を固め、検討会に一任された。
- モニターツアーが反響を呼び、春以降、本格実施の見通しがついた。
- 風待ち地区の復興まちづくりに寄与する保存活用の第一歩を踏み出せた。

（5）事業実施後の課題

- 復興計画がなかなか進捗せず、情報収集や調整に時間がかかった。
- 検討会が主体となった募金活動の実施までは至らなかった。
- 効果的な情報発信まで手が回らなかった。

（6）今後の展開

- 保存活用計画に基づき、第二段階に進む。
 - 都市基盤整備に伴う一時曳き家など。
 - 基盤整備を予定していない地区の登録文化財の本格修理。
- 検討会からの積極的な情報発信と募金活動の本格的実施。
- 上記と連動した「風待ちツアー」の本格的な実施。